
馬鹿ですが何か？

祿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿ですが何か？

【Nコード】

N9262Z

【作者名】

祿

【あらすじ】

まったりと生きてきたとある馬鹿と、それに比べてキチツと生きてきた男が、神の手違いで死んでしまう。
かわりにインフィニットストラトスの世界に転生させられることになる。

おまけに変な能力も付けられていた。

二人は、まったりと生きて行けるのか？

NEW

唐突だけが俺は思い付いた。

命は一つであり、人間に前世や来世など”次の人生”はないと。

人は死んだら、そのまま人格や記憶など消えて無くなる。

前世来世、天国地獄、転生蘇生などは人間の都合のいい妄想や想像でしかない…けっきょくは存在しないものだ。

「…………で、結局なにがいたいんだ？」

「やだなあ、てっちゃん。もうわかってるくせに」

はあ、とため息をつく友人を飛び越えて親友（仮）の佐久間哲、通称てっちゃんは、めんどくさそうな顔をしながら見てきた。
まあ…………あれだ。自己紹介しとくと思いますか。

「岡山祿 みどり 17歳男 乙女座で誕生日は想像に任せるとして血液型はO型だ。よろしくな！」

「誰に自己紹介してんだよ…………てかさっきのは何なんだよ」

「いやあ、バスの中ってひまじゃん？だから頭にポツと出てきたのがさっきのなのだ。で、一度しかない人生を無駄にせず、しっかりと生きていってほしいって言いたいわけ」

「たまにいいことっぽいこと言うよな」

そんな雑談をしながら、てっちゃんの高校に向かって歩いている。
てっちゃん曰く、今日は文化祭なんだって、もう昼なのにここでのな
にしてんだろうね？

重役出勤とはなかなか偉くなったんだな。

「お前はほんとくと寄り道するからな。その間に日が暮れる」

「へー、そりゃ大変だったね？」

「お前のことだぞ!？」

ぽてぽてと歩いていると、横断歩道のだ真ん中に金色に光る円形の
なにかが目に入った。

てっちゃんは気づいてないみたいで、ぺらぺら何かを喋っている。

「(このまま気づかれないように確認して、500円玉だったら即
回収)」

「(こいつ絶対聞いてないな：今度は何を考えてんのやら)」

金色に光る円形のなにかの横を通り過ぎるときに横目で確認。

それは期待していた通りの500円玉だった。

車がこないのを確認して、すぐにしゃがみ込む。

「みどり危ない！」

「へ？」

横断歩道を渡ったところにいたてっちゃんが、すごく焦った顔をしていた。

右側がやたら騒々しくて、見てみるとトラックがこちらに突っ込んできていた。

避けようにも距離は25メートルくらいで、スピードも速くて、とてもじゃないけど避けられない。

「……まじか？」

「ん？待てみどり。なぜ俺を掴む？」

「てっちゃんシールドα！がぐ！」

「ぶるうわ！」

あえなくトラックと正面衝突。もちろん俺とてっちゃんは即死。

一度きりの人生をどうのこうの言ってた奴が友人というより、悪友に近いやつを道連れにするのは割と愉快（笑）

——……い……か

「……………」

——おき……か……の……バカ……

「……………（いらいら）」

「おきんか！この馬鹿者！」

「うっせえな……人が気持ち良く寝てんのに耳元で騒ぐなよ、糞豚。殺されたくないなら黙ってろ屑。食い殺すぞ！」

「……………（うるうる）」

「み、みどり？少し落ち着けよ、な？」

聞き覚えのある声がしたので、そっちに目を向けると悪友てっちゃんがたっていた。

……あれ？おかしいな……てっちゃんは俺が殺したはずなんだけど、何で元気に立ってんの？

「そういえばお前……俺を道連れにしてくれたよな？」

「記憶にないな。改ざんされたかも」

「あー。そのことなんじゃが……あれはわしのせいなのじゃ」

口調に似合わないような容姿をしている女性（仮）は、申し訳なさそうに罪を自己宣告してきた。

よく見るとセミロングの黒髪で小柄、モロ好みに当て嵌まる。

「あなたのせいってどういうことですか？」

「ちと手違いでトラックをお主に確実にぶつかる距離に置いてしまつてのう……まさか友人を盾に使う鬼畜な奴だとは思っておらんかったがな」

「だよねー、ちゃんと車がこないのを確認したのにトラックが来てたのは不思議だったからね」

こん畜生……一度きりの人生をどうのこうのって語ったあとなのに無駄死にじゃないか。

てかこの人は何物？果物？たべていいのかい？

「食べれないから落ち着けみどり。話が進まない」

「わしは神じゃ。まああれじゃ、お主達を転生させることしか償えんが いいかの？」

「まあ生き返れるなら俺はいいですけど」

「（転生？さっき否定したばかりなのに実在するという新事実……これは新たに新みどり理論を考えなきゃ）」

新みどり理論を考えている間も、話し合いは進んで行った。交渉とかはてっちゃんにいつも任せきりなので、けっこう信頼してる。

いろいろ質問されたけど、てきとうに返事しといた。

「それじゃあ、転生させるぞい。準備はよいか？」

「はい」

「元の世界だよね？」

「いいや」

「え？」

てっちゃんの返答に驚いていると足元が光始めた。

てっちゃんに視線を戻すと、やりきったって顔で教えてくれた。

「俺達がいくのはインフィニットストラトス……ISの世界だ」

「まてまて！それは俺がまったりできないという最悪のフラグが立ってしまうじゃないか！」

神（仮）とてっちゃんは微笑んでゆっくりと口を開いた。

「「どんまい」」

「うるせええ！ 転生中止！ やめい！」

必死の抵抗はむなく、光に飲み込まれた。

二人を転生させた神は二人の立っていたところを見つめてたたずんでいた。

そして自分の体を抱き、身震いすると顔を紅潮させてうっとりとした。

「……ふふふ。みどり……か」

神はスウツと姿を消した。

次の瞬間にその空間は割れて無くなった。

1「いらっしやいませ!」

俺は考えた。

前回、おっちょこちょいな神様に祿理論をひっくり返されてたので、新しい祿理論が必要になったからだ。

今回は絶対ひっくり返されることがないようにしなきゃいけない…
…俺のプライドがそうしなきゃいけないって言ってる。

「……………」

「……あのう…岡山くん?自己紹介してくれない?」

「あっ、はい」

いっけね。

小学校の入学して一日目だけ?出席番号速いってだるいねー、ほんとにめんどくさそうな。

「岡山みどりです。お腹減ってますので食べ物恵んでください。以上です」

「あっはい。ありがとう、でもね?食べ物給食のときにしかでないよ?」

わかってるつつうの。

ちなみに俺は岡山家に生まれて名前はみどりだった。
前世（？）と変わってないのであんまり嬉しくないが、前世（？）
の岡山家よりだいぶ自由度が高いからお気に入りだ。
てっちゃんの方も前世（？）と変わってない。

「佐久間哲です。よろしく」

ね？変わってないでしょ？なんの面白みもない第二の人生だわ。
そうこうしてる内に授業が終わった。

「みどり、やっぱりあれと同じクラスになったな」

「あーあれね。まあいいんじゃないか？俺的にはほのぼの生活に水
を差されない限り何かしようとは思わないよ」

「お前らしいっちゃらしいな」

それから何ヶ月かたったある日、いじめというものを生まれて初め
て生で見た。

割と愉快なものではなく不愉快極まりないので、幻滅した。

「おい。おとこ女は一人で掃除しろよ」

「そうだぞ。この汚い机と教科書もな！ギャハハハハ」

ポニーテールの子を複数の男子が囲んで、その子の机を倒して教科書をぶちまけて踏みにじっていた。

机にも落書きしてあり、いますぐにぶん殴ってやりたいが、てっちゃんに羽交い締めになされて動けない。

「おい、何羽交い締めにしてくれてんだよ」

「落ち着け、まずは落ち着け。最初は言葉からにしよう、いきなり暴力はまずい」

「仕方ないなあ」

そういったのはいいものの実行する気なんてサラサラない。ドアを勢いよく開けて教室に堂々と入る。

「おい、何だよお前」

「あー、こいつは確か女みたいな名前のやつだぜ？確かみどりっていったよな？」

「みどりちゃんとかおんな男だ！ハハハハハ」

ぶち

「お前「何してんだ！大人数でよってたかって！」……ち」

一夏登場で怒りゲージが一周回って安定ラインギリギリで止まった。別に台詞遮られて怒ったわけじゃないし！

「なんだよ！お前、このおとこ女とおんな男の味方すんのかよ！」

「俺はお前達みたい仲間が多くないとそういうこと出来ない奴が大嫌いなんだ！」

「なんだと！？このー！」

一人の男子が一夏に殴り掛かった瞬間に、俺はそいつの腹を思いっきり殴った。

泣きべそかきながらうずくまる馬鹿1をほっとき、次々と殴り掛かってくる馬鹿複数をてっちゃんと蹴散らしていく。

「てっちゃん。相手は大人数だから急所をついてけ、幸い全員男だからな」

「まあ、まともにやったら面倒だし、手間かかるもんな」

途中から一夏と箒（途中で気づいた）が参戦してくれたので、だいぶ楽に片付いた。

で、意外だったのが一夏と箒のコンビネーションが良かったのは何となくわかってたからいいんだけど、二人とも強いね。

「ありがたいな、助けてくれて」

「「いえいえどうもどうも」

「ほら、箒もお礼言えよ」

「あ、ありが…とう」

「「いえいえどうもどうも」

同じことを繰り返し使う。
けっこう楽しいもんだ。

「岡山も佐久間も強いな！どこか道場とか行ってるのか？」

「俺は我流かな。あとみどりでいいよ」

「俺はコイツの技の実験台にされることがあるからな。それで身についた、あと「てっちゃんていいぞ」……おや？」

「へー、みどりもてっちゃんも凄いんだな！箒も俺もけっこう強いんだぜ」

「さっきの見たらわかるよ」

帰り道が何故か大半一緒だったので歩きながらしゃべる。
さっきの男子は今頃職員室でお説教だ。

愉快愉快！

「……………」

「ん？みどりどうした？」

「あー一夏、みどりは時々いきなり考え事することがあるんだ。気にするな」

「なぜいきなりなんだ？哲」

「なんでかしらんけど、ふと気づくことがあるんじゃないか？」

「へー苦労してんな」

そのまま家に帰り着くまで考え事は続いた。

考え事の内容はプールサイドに豆腐を並べるにはどのくらいの量の豆腐が必要か、というとても下らないものだった。

それから幾年が立ち、高校入試の前日。

「時間進むの速いな。ありえないな。読者のみなさんにあやまれ馬鹿」

「何いってんのやら……」

俺は受験勉強から逃げだし、海岸を散歩している。

鈴の帰国やらあったけど、いい一年だったと個人的には思っている。ぽけーっと海を見ていると沖の方にプカプカと浮かぶ人型のものがあつた。

「ねえ……てっちゃん」

「なんだ？」

「あれって人じゃないよね？木か何かだよな？」

「んー……人じゃないと信じたんだけど、どうみても人なんだよな」

「「……………」」

しばらく沈黙……あまりの出来事に頭がついていかなかった。

今は2月、海水浴を楽しむような季節じゃないし、見た感じサーフボードを持っていない。

おまけに沖の方にどんどん流されていってる気がする。

「……まずい！」

ハッと我に帰り、海に猛ダッシュする。
なりふり構っていらなくなるときってあるよね？

「おい！ みどりお前泳げないだろ！」

「水面を走ればいい！ いくぞ…瞬足！」

水面を沈む前に蹴り、前に進んでいく。
てっちゃんからは人の形をした人じゃない物を見るような目で見られてる気がする。

緊急事態なら人は限界を超えられるんだ。

「よっと！」

浮かんでいた人をうまい具合に担ぎ、浜に戻っていく。
しかし足に限界が来たみたいで、どんどん重くなって行って浜に無事たどり着くのが難しくなった。
ので、奥の手を使うことに

「佐久間哲！ 受け取れええええええええええ！」

「うおおおお!!」

ドスン

「危ねえな!人を投げるんじゃない!俺がキャッチしなかったらどうなってたか……………ん?みどり?…………あれ?」

バシヤバシヤ

「…………さむっ」

「何で濡れてんの?」

「足に限界が来て、海にどぼん」

「なるほど、なら早く帰るぞ。ていうかこの子どうすんだ?」

てっちゃんが意識のないやたら見たことがあるような無いような感じの女の子を指差した。

この時期に海に入ってたんだから、俺より危険な状態なんだろう。

「迷ってるヒマはないね。ここからだ俺の家が近いから俺が連れて帰る」

「大丈夫か?」

「なんとかなるだろ」

俺は女の子を背負って、家に向かって走り出した。家の前になると、てっちゃんの前に出て両手を下に組む。

俺は靴を脱いでその手を踏み台に2階の自分の部屋の窓のところまで飛ぶ。

ジャンプする瞬間にてっちゃんが手を上に上げてくれたので、だいぶ滞空時間が稼げた。

蹴りで窓を開けてなかに転がり込むと同時に暖房を付けて、身ぐるみ剥がしベッドの中にほうり込んで掛け布団をかける。

「ふう……あとはあいつの回収だ」

部屋を出て、階段を下りて玄関のドアを開けると、俺が脱いだ靴を持って待っていた。

なぜかおまけにもう一人女の子を担いで……。

「……………助けてくれ」

「……………入れ」

解説しよう。

てっちゃんは女子が苦手で滅多なことが無い限り、自分から女子に触れようとは絶対にしないが、恋愛対象になるのは女なのだ。

本人もなかなか悩んでいるがどうしようもないのでほっとしてる。

「でだ、なぜにお前の部屋に入った瞬間に目に入るのが、ベッドで寝てる子が着てた服なんだ？」

「濡れたままじゃ気持ち悪いと思って……大丈夫、下着姿は見えない。見ないようにしたから」

「身体能力全開でいったのか……まあ妥当だろうな」

そういうながら担いでた子を俺がひいた布団に寝かせた。
冷や汗かいていたのは気にしない方がいいだろう。

「目が覚めるまで何も出来ないな」

「覚められても困るけどねー」

「なんでだ？……っと、そうだったな」

俺は立ち上がり、母さんのところにいつて事情を話すと、嬉しそうに猫と犬のパジャマを持って俺の部屋にいった。

誰に着せようとしていたのか甚だ疑問であるが、とにかく第1の危険は去った。

「ふふふ、似合ってたわー♪」

「もう着せたんだ。はいね」

いつもはすべての行動が遅いくせに

「可愛い子連れて来たわね。彼女さん？」

「事情説明したよね！？どうやったらそうなるのさっ！」

『あらあら』といいながらキッチンに戻っていった母さんの背中を見る限り、完全に勘違いしてる。

「（しかし、海の子…どこかで見たような…：…こう、転生直前かそれ以降に…：…なんだっけ？）」

考え事しながら部屋に戻ると、カッターが俺の頬を霞めて通過した。飛んできた方向を見てみると、必死に説明してるてっちゃんと凄い眼光で睨んでくるてっちゃんの担いでいた女の子がいた。

「ぶっちゃけた話。その体勢は勘違いされるよ？」

「助けるよ！普通に助けるよ！」

キッと睨んでくる女の子の前に正座する。

もちろん手はみじかにあった紐でくくつとく。

すると警戒を少し緩めてくれた。

俺だけ

「なあ……何も解決してないように思えるの俺だけ？」

「あの、岡山みどりです。あなたは？」

「………江藤ありす。お前達は何者だ」

「漬け物、果物、くせ者、悪者、馬鹿者、生もの」

俺の返答が気に入らなかつたらしく、てっちゃんを簀巻きにしてから俺を押し倒してカッターを首に付けられた。

なんだか……心の奥から浮き上がってくるこの感情は何なのか知りたい。

「馬鹿にしてるの？ちゃんと答えないと殺す」

「ははは、やれるものならどうぞ？」

そういいながら自家製クラッカーをありすとやらの目の前でならした。

白い煙りが彼女の顔目掛けて吹き出し、視界を殺した。

その隙にありすの手からカッターを取り上げて、手に巻いた紐で拘束して床に押し伏せる。

「さあ、何で気を失ってたのか教えてもらおうか！」

「……くっ！」

悔しそうな顔をしながらこちらを睨むのをやめないありすに何だか申し訳なくなってきた。

てっちゃんに助けを求めて視線をやると、『お前に任せた！』と言
い足そうな顔をしていた。

「えっとごめん。とにかく抵抗はやめよ？ 別にとって食おうなんて
思っていないから」

「……………」

「まああれだ。今から質問するからあってたら頷いて、間違ってた
ら横にふって。じゃないとプリンをぶちまける」

「……………（コク）」

「今ありすは追われている」

「……………（コク）」

「……そいつらは裏の世界の者だ」

「……………（コク）」

「ありすはそいつらと一人でやってもへっちらだ」

「（コクコク）」

「正直お前は馬鹿だ」

「（ブンブン）」

大体の事情はわかった。

あとはどうするかだけど、この世に安全な所なんてあるわけないし………あっ、あった！

1番安全で1番強い人がいてエリート集団の塊の学園が！

「てっちゃん一夏に連絡だ！コード233」

「了解！」

紐をほどいてやったらすぐに携帯を取り出して、いろいろあの人に言ってくれるように手配している。

ありすは顔を真っ青にして、暴れだしたのでギュッと両腕で押さえしておく。

顔が真っ赤になった気がするけどコイツのためだ。

「はなせ！この！」

「落ち着きなよ、君一人じゃ絶対にそういう人達には敵わない」

「やってみなければわからないだろう！離して！」

「もう……安全な場所で普通の女の子として暮らしてほしいから、あの学園に入れてもらえるように頼んだのに……」

「…あの学園って？」

「IS学園。エリートが集まりさ、そこに友人の姉が教員やってるって、とあるウサミミに聞いたから行けるはずだよ？あ、友人の姉って元世界一なんだよ」

ありすは俺の話を『ありえない』みたいな顔をして聞いていたので、そのままの体勢でイロイロ話してあげた。

ウサミミって単語が出るたびにピクッてなって、その人について質問してくるから、ありすという人間が少しわかった。

2「わんもあぷりーず」

割と題名にある名前の曲がある気がするし、誰か作ってくれないかなと思ってたりする。

元気で明るい曲になったらいいなっていう願望。
しかし、それどころではないのが現実です。

「……（ぱくぱく）」

「……（もぐもぐ）」

目の前の担ぎ込んだ少女二人は、よほどお腹が減っていたのだろう
：ガツガツと食事を食べていた。
母さんも何だか嬉しそうな顔しながらドンドンと食事を運んでくる。

「：ねえ。どうしてこの家の食事はこんなに美味しいの？」

「それはねえ。みどくんが強運の持ち主でお金ががっぼがっぼ入るのよ。だから高級食材を使ってるの」

「へえ……あんたに取り柄があったのね」

「俺は割とスペック高いんだぞ」

「そういえば佐久間って人どこいったの？」

「家に帰ったよ」

少し驚いた顔をしてこちらを見るポニテのありす。
どうやら俺とあいつは従兄弟か兄弟だと思っていたらしい。

「で、海で浮かんでた君はどうしたの？」

「わしか？」

……………ん？この喋り方知ってるぞ。

「わしはお主らの後を追ってきたのじゃ。なかなか面白そうだった
のでな、体も人間と全く同じにしてるから問題ないぞい」

……………まさかね。

ありすの隣の女の子に体を近づけて、小声で話しかける。

（……………まさか、おっちょこちよいの自称神様？）

（なっ無礼者！わしは正真正銘の神様じゃ！みどりよ、いつになっ
たら信じるのじゃ？）

（まさか追っかけてくるとは、さすが落ちこぼれ。尊敬するよ）

（うぬぬ！言うてはならぬことを言いおったな……………神の力思い知る

がいい)

(俺の勘で言うと、今のお前は治癒くらいしかできない)

(うっ!)

悔しそうな顔をしながら料理を頬張っていく。

頬っぺたが膨らんでリスみたいで可愛かったが、なぜかありすに睨まれているのに気づいた。

「えっと…なに？」

「何でもないわ。それでこの子は何て言う名前なの？仲良さそうだし、知ってるんでしょ」

「実は知らない」

「なんと！」

神様が驚いたような声をあげて、身を乗り出してきた。
すかさずおでこにデコピンして椅子に座らせた。

「ぬおお……みどりよ、お主の体は強化してあるからデコピンでも痛いんじゃない」

「へえ、初耳だ」

「ちなみに身体能力も上げてあるのじゃ」

「ほう」

「わしのことは敬意を持って、そうじゃな……恋とよべ」

「わかった、恋^{れん}ってよぶ」

「人の話きいておったのか？まあそれでもいいが」

ほむほむとグラタンを食べていく恋は、ありすに一瞥してから少しニヤリと笑った。

何考えてるのかよくわからない、まったく面白そうだから俺達を殺して転生させたな……。

ブルルルポロロロ

「おっと失礼」

一夏から電話がきたので立ち上がり、場所を移動する。

「はい」

『みどり、一応千冬姉には言ってみたら『出来ることはない、普通に受験して入れ』ってさ』

「果てしなくケチだな」

『でもなんで千冬姉なんだ？ IS学園ならその教員に頼めばいいのに』

「さあね、うーん。まあ妥当だろうね、仕方ない正攻法で行くかな。ありがたいな一夏」

『ああ』

電話を切り、ポケットからある紙を取り出した。
その紙にIS学園と記入し、もう一度ポケットにしまった。

「くくく、千冬さん：俺の正攻法は他の奴とは違うよ？」

満月の夜に一人、庭に立ち悪い笑みを浮かべながら、家のなかに入った。

次の日、朝早くに家を出て学校へ猛ダッシュした。

基本朝早く学校に行くが、それより早い、人に捕まえられたくないのと遅刻防止だ。

ちなみに9年連続皆勤賞狙っております。

今日は調子がいいでございます。：な・の・に！

「ふふふ……………（ニコニコ）」

「…………むう」

目の前にいるセミロングの活発そうな身長150のミニママ娘のせいで、教室に行けない。

普通なら身体能力を駆使して向かうところだが、下駄箱の前に立たれると履き返れないので膠着状態。

試験？そんなもんもう終わったわ。

——回想——

「多目的ホールって広いよな、ありす大丈夫かな」

「ああ、迷子になるわけだ……次の扉を開けて人に聞くぞ」

「「賛成」」

ありすと恋と別れて、試験場に向かっている内に迷子になり、俺とてっちゃんは一夏はフラフラしていた。

そうしてるうちに一夏が扉を見つけて開けて中に入る。

「うーん。誰もいないよ?」

「あれ?これってISじゃないか?」

「(まずいな、あれに触れたらIS学園行きか)」

「てっちゃんどうした？」

俺はてっちゃんが険しい顔をしていたので、近くにあった灰色のものによつ掛かりながら、声をかけた。

すると背中の方が明るくなったと思えば、黒い服を着た人達が数人入ってきた。

「君達ここでなにしてるの！？関係者立入禁止よ！」

「えっ I S が男に反応してる……」

「今すぐ上に連絡を！」

まずいことになった。

すっかり忘れてた……あれだ、ほらよくあるじゃん？こういうこと。

「おい、みどり……厄介なことでくれたじゃないか」

「どうなるんだ？俺達」

「さあねえ……さらば！」

「「あっ！汚ねえ」」

一夏を踏み台にして女の人の頭の上を飛び越えて廊下に飛び出す。
そして出口に向かって走った。

「まて！」

「待てといわれて待つ馬鹿はいません！」

「こうなれば実力行使だ！」

「追いつけるものなら追いついてみな！」

——回想終了——

というわけで学校に逃げて来たわけだ。

そしたらミニマム娘が下駄箱の前に立っていて、それを物影に隠れて見物してるという状況が出来たわけです。

「（ここであいつを味方につけられたら、割と戦力になるんじゃないかな？）」

「……みどり大丈夫かな？」

「（ん？）」

「あいつ行き当たりばったりだから多目的ホールでやらかしてなきやいいんだけど」

「なんて失礼な！」

「えっ!？」

ミニmam娘はいるはずもない人の声を聞いて驚いた顔をして振り向いた。

「普通受かってるといいなとかじゃないの!？」

「ていうかあんた受験は!？」

「あんまり思い出したくない」

いろいろやらかしてきたからね。
今は追われる身です。

「まったく……あんたはいく先々で問題起こすわね」

「まあね。それで何してんの？」

「えっ! あ、その……な、なんでもいいでしょ!」

「まあね……」

ふと、後ろを見ると黒い服を着た人達が出口を封鎖していた。皆さんの目をみるかぎり、怒ってるようではいらしています。

「我々について来てもらおうか」

「ちょ、みどり何して来たの？」

「えっと、IS触ってきた」

「えええ…」

じわじわと逃げ道を潰されて距離を詰められてきた。

後ろのミニマム娘もさすがに怖いらしく、袖を掴んできた。

「……うーん。目的は俺だからお前は危害加えられないと思うんだけど」

「そ、それでも怖いものは怖いの！わ、わるい！？」

「いえ別に」

完全に囲まれた状態で何かできないわけで、ブーツと黒服を見ていると近寄って来なくなった。

すると黒服の後ろから一夏の姉の千冬が出てきた。

「みどり……お前何してる？」

「身の危険を感じて逃亡」

「一夏と佐久間はあの後、ISに触れて使えることがわかった。いますぐにどうこうできるわけじゃないから家に帰した」

「な、なんだと！それじゃああそこで大人しくしてたほうがよかったんじゃない」

「当たり前だ馬鹿者！」

ゴッ

どさっ

「つれてけ」

げんこつで悶絶している時に担がれて運び出される。
これはこれで誘拐されてるみたいで心が躍る。

「お前もだ」

「えっ、あたしですか？」

「ついて来い」

車に乗らされると、隣にミニマム娘が乗ってきた。

これはタクシーではないのですが何考えてんだろうね。

「あんたの巻き添いよ」

「へー、そりゃ大変だね」

おや？拳を握りしめて震えておるではないか、怖いのかね？
仕方ない手を繋いでやるか……巻き添いにしたんだからこれくらいはしてあげないと、置きざりにした一夏とてっちゃんに怒られる。

ぎゅ

「えっ」

「俺がいるから怖くないよ？」

「なにその理屈。すごく説得力があるけどおかしいわよ？」

「すまないな、怖がらせて」

助手席の千冬がこちらを向いて話しかけてきた。

そう思うなら、左隣りに座ってる人の警戒の眼差しをやめさせてもらえないだろうか？

プレッシャーがすごいのですが……。

「い、いえ。大丈夫です」

「みどり。お前が逃げなければ、お前の彼女も怖い目に会わずにすんだんだぞ」

「か…彼女……／＼」

「すみません……でも彼女ではないですよ。このミニmam娘と俺は」
「なんですってえ！」

いきなり隣のミニmam娘が怒り狂え始めた。
これは危険色だ。

「誰がミニmamよ！まだまだ成長期来てないのよ！」

「成長期来てて、それだと末期だよね？」

「くう！見てなさいよ！高校卒業する時にはナイスバディになってやるんだから！」

「ほいほい。特に期待しないで待ってるよ」

「ついたぞ」

車から降りて、広い部屋に案内された。
そこにはISが一台とウサミミとネコミミが一つずつ置いてあった。

これでなにをするのかな？

「……」

千冬はウサミミが突き出ている壁を思いっ切り殴りつけた。
するとそこからヒョコツと人が出てきた。

「いったああい！ちーちゃんひどーい」

「それではみどり。ISに触れろ」

「あいよー」

核ミサイルの発射ボタンを軽く押すノリでポンツと触れると、IS
が光だした。
するとISの中に吸い込まれるような感覚と同時に意識が遠くなっ
ていった。

「……んー」

気がつくと俺は地面はコンクリ、空は雲で隠れている殺風景なところに立っていた。

後ろに気配を感じて振り向くと、ボロボロのワンピースを着た小さい女の子がたっていた。

「……貴方、なんで生きてるの？」

「んー、神様に転生させられてね。第二の人生満喫中」

「そうじゃない」

「俺は俺のために生きてる」

そう答えると、女の子は俯いてフラフラと俺の周りを歩き回り始めた。

何がしたいのかわからないんですが？

「……結局自分のためなのね」

「そうだよ？ 例えばあの人と一緒にいたいから悪いものや引き離すものから守る、そして生きる。人間でいたいから、人間としての最低限のマナーやルールを守る、そして生きる」

「……最終的に、自分のしたいこと〓何かを守り、生きるってこと

「？」

「うー、まだわかんないや。でも結局自分の願いなんだよね。誰かと一緒にいたいとかってさ、だから自分のため」

「……ふーん。馬鹿な上に変な人」

「ありがとう。で、そろそろ戻りたいんだけど」

「……今日はこのへんでいいわ。またね（・・・）」

……り…み…ど……

「みどり！」

「ひゃい！」

ものすごい嫌な予感と共に意識が戻ると、目の前に拳が迫っていた。顔を横に傾けてなんとかかわすと、今度はアッパーが来た。かわせそうになかったので受け止める。

「ああ、よかった。気がついたのね」

「その起こし方はいろいろまずいからね！」

「立ったまま動かなくなったあんたが悪い」

このミニmam娘め、いつか仕返ししてやる！
ゴキブリのおもちやでな！フハハハハ

「まあISを動かせることはわかった。これで3人と1人か……」

「何の数？」

男でISを動かせるのは俺と一夏とてっちゃんの3人、あと1人が
わからないんだけど。
もしかしたら俺の思ってることは違うことかもしれない。

「受験無しで、IS学園に入学する人数だ。それで君の名前は？」

「あっ、あたしは高橋美佳です」

「みどり、一夏、佐久間、高橋の4人はIS学園に入学だ」

「……………はあ」

「えっ？待ってあたし明日受験……」

「それは私が話を通しておく。IS学園の制服なども用意しとこう」

「……………えええ…」

「あ、わかりました」

「それでは今日は解散」

これからめんどくさい日々が始まります。
ヘルプミーです。

2「わんもあぷりーず」(後書き)

「ねえ、みーくんってやっぱりすごいね♪」

「いきなりどうしたんだ？束」

「いきなりISの人格とコミュニケーションとったんだよ？すごいなあ！すごいなあ！ちーちゃん、このISのコア貫うね♪」

「……はあ、わかった。私が上に話を通しておく」

「ありがとう！愛してるよちーちゃん！（待っててね！すごい作品っちゃうから♪）」

3 「入学式的何か」

えー、みなさん。

大変申し訳ないのですが、前回の話で少しおかしいところがあったのですが気にしないでください。

さて、どこの校長も話が長いのは万国共通なんだな。
いい加減にしてほしいよ。

「次は生徒会長の話です」

「なげえ……」

（静かにしろよ、こんなところで目立ちたくないだろう？）

（たしかに）

（わしは平気じゃ！）

（私は嫌）

（ありすの言う通りよ。バカミドリ）

生徒会長が壇上に上がるとこちらにウインクしてきた。

となりのてっちゃんの顔色が今にも吐きそうなくらい青くなった。
袋用意しとかないといけないね。

（てっちゃんてっちゃん、はい。穴開きビニール袋）

（意味ないよね！？穴空いてたら使えないよね！？）

（はっはっは、気合いだ気合い！）

『こら、その1日IS学園関係者から逃げた子とその相方。おしやべりしないの、おねーさんの話聞かないとダメよ？』

「ごめんなさい、視線恐怖症になるくらい視線を浴びてるものなので気分が……」

『おねーさんが介抱してあげよ』『全力で遠慮します。続きをどうぞ！』『ちえー』

残念そうな顔をしたと思ったら、すぐに明るい顔に戻った。きつとこの人小悪魔的な要素を持っているんだなと思った。

（ん？みどりどこいくの？）

（なんでわかったの？俺のこと見すぎだよ美佳）

（なっ！別に見てないわよ！）

（さらば！）

ばれないように素早くパイプ椅子の下を通り、女子生徒にお願いし

て教師にバレないように出口に向かった。
あとすこしというところで足を退けてくれない子に遭遇した。

(あのう……)

(……入学式はちゃんと受けるべき)

(君、生徒会長に似てるね)

(?!?!?……ふん)

(……大人しいぶんこっちの方が可愛くみえるんだよな)

(……えっ?)

(おっ!道が開いた。じゃね!またどこかであったらよろしく!)

体育館から出るとニコニコとしたウサミミを付けた元気な子束さんが目の前に立っていた。
どこことなく嬉しそうに笑っている。

「さすがみーくん!あんな退屈な空間に留まれるような器じゃないよね♪」

「褒められてるのかわからないけど、ありがとう!」

「それでねえ。これあげるよ!」

そういいわっかのチェーンを渡してきた。

それを受け取り一回振って手首をわっかのなかに突っ込んでつける。

「うんうん。やっぱり左手につけると思った♪」

そういい、東さんはピョンピョンと窓から飛び降りてどこかへいつてしまった。

入学式も無事に終わり、教室の席に座ってソワソワしていた。
ちなみに廊下側の1番前という速く帰れるというラッキーな席だ。
後ろの美佳と左斜め後ろのありすの視線が痛かったが、隣の席のてっちゃんの顔色が悪い。

(てっちゃんてっちゃん)

（なんだ？袋ならいらんど、ましてや穴開きなんて）

（ホットミルクココア）

（わかっててやってるよね！？今俺がどういう状況かわかっててやってるよね！？）

馬鹿なことやっているとミニマム先生が入ってきた。

小さいね、こう俺の方よりすこし上みたいな感じ……あつ171あるからね俺は。すこし小さいね

「入学おめでとうございます。私は副担任の山田真耶です、一年間よろしく願いますね」

「お願いちま！……します」

元気よく返事しようと思ったら、素晴らしい具合に噛んだ。

ミニマム娘やありますなんて口を押さえて笑ってるし、周りも「か、かわいい……」「ちまって……ぷぷ！」的なつぶやき聞こえるし。

「大丈夫！先生何も聞こえてないからね、ね？」

あげくのはてにこれだよ。
泣けてきたわ。

「えっと出席番号順で自己紹介してってください」

うーん。出鼻くじかれた………何者かの陰謀だよな？

誰だこのやろー！掛かってこいや、やっぱり来ないで平和が1番。

「次岡山くん」

「岡山みどりです。さっき噛みましたが、わざとですウケ狙いです。決して素ではありませんので、あと趣味はゲーム読書考え事に寝ることです。」

そうして各々自己紹介を終わらせた。

そして休み時間突入と同時に一夏が箒に連れていかれた。

「……お熱い事で」

「お似合いだね。昔からさ」

「ふむ、確かにのう」

「でも織斑君は篠ノ之さんの好意に気がついてないんでしょ？」

「あたしにはそう見えるわ」

てっちゃんと恋、ありす、美佳は俺の机の周りに集まっている。

他の子は何故か俺とてつちゃんと一夏を遠巻きに見物しているので、スペースが有り余っている。そして俺は動く気がない。

「そういえばISの知識なんてかけらも持ってないよ？」

「あーおれもだ」

「あたしは中学で一応基本的なところを習ったから平気！」

「私も。というか独学でいろいろやってるから中レベルくらいまでなら平気」

「わしは……だめじゃな」

恋がうなだれているのを、美佳が頭を撫でて慰めている。ちなみに恋は制服を巫女服みたいになっている。ありす、美佳、てっちゃんはノーマル。

「それにしても、どこ行ってもみどりの服装はあまり変わらないな」

てっちゃんが俺の制服を見て、そうつぶやく。少し背中の方が長くなってるからそう思われても仕方ないか。ちなみに小細工してあります。その影響で長くなっとなります。

「一応言っておくが、危ないものはその制服に入れておくなよ」

「なぜわかった！エスパーか！？」

ゴッ

「あひい！」

いきなりげんこつをされ、地に伏せる。

決して痛すぎてではない、追撃をかわすためなのだ！
振り向くと織斑千冬が立っていた。

「岡山、危険物をだせ」

「ははは、何いってんのやら。持ってるわけないじゃ」「はやくだせ」
…はい」

上着のなかに手を突っ込み、ペットボトルとホッカイロ、七ツ道具、
ペンチ、USBメモリ、鉛筆、チョコボールを出した。

「ふむ、ペットボトル、USBメモリは爆弾。ホッカイロは煙幕、
その他は他の目的に使うのか」

「なかなかの洞察力ですな！軽く見られただけで見破られたのは初めてですよキャイン」

げんこつ二発目いただきました。
怒気が目に見えるくらい凄まじいものになっていた。

「この学園に反乱を起こすつもりか？」

「違いますよ……、ちょっと耳を」

勘違いを生むのはよくないので聞かれちゃいけないこと話そう。
仕方ない仕方ないちょー仕方ない

（一夏やてっちゃんや俺はISを動かせる男っていうイレギュラー
なんですよ？）

（そんなものは知っている。ならなぜここにこれを持ってくる必要がある）

（IS学園とて人が運営、整備、監視してるものです。必ず穴がある…そこに付け込まれて狙われでもしたら大変じゃないですか。丸腰で戦うのは無理ですよ？軍人でもあるまいし）

（たしかにな、だがここは世界で最もセキュリティの高い施設だ。
そう簡単に進入を許すとなると相当な相手だな……）

（はっきりにいますが。丸腰だと一夏の安全は俺もてっちゃんも保障できませんよ？3人一緒にいるなら別の話ですが、亡霊さんには敵わない）

「はぁ……わかった。でも爆発物はダメだ、せめて刃物にしておけ」
「了解！」

そういい、袖や裾など服の間からゴムボールやらスーパーボールやら取り出した。
すると織斑先生はどこからともなく段ボールを取り出して、そこにいれさせる。

「よくもこんなに作れたな」

「はい。それと世界で最もセキュリティの高いのはウサミミさんの近くではないでしょうか？」

「……ふふふ……ははははは！たしかにな、あいつのそばなら安全だ」

織斑先生は爆弾が大量に入った段ボールを軽々と持ち上げて、教室をでていった。

その瞬間に美佳が俺のみぞに改心の一撃を入れた。

「ちよつとみどり！何危険な物隠し持ってるのよ！」

「ぐう…待て美佳、話せばわかる」

「うるさい！」

ばきい！

「ぐえ！てっちゃん！助けてくれこのままじゃもう死んでしまう」

てっちゃんにヘルプを出したは良いものの、軽く無視された。

「あの、佐久間くん？私小南っていうの、一年間よろしくね」

「ああ、こちらこそよろしく」

「佐久間くんはどんな本が好きなの？」

「俺はラノベとかかな」

「私もラノベ好きなの！バカテスとか面白いよね、最近明久神懸かってるけど」

「たしかにな、なんか最近輝いてるんだよね。高城って愉快的な性格してるのもウケたし」

「おい！てめえ助けろや！親友が死ぬぞおい！」

仲良く話してる最中申し訳ないと思ったが、事情があるので遮らせてもらう。

死にたくないし、さっきから美佳の拳が赤く光ってるように見えるし。

「俺とお前は親友でわない……悪友だ!」

「友にはかわりないだろ! たすきゃ!」

「まだ生きてる……はやく片付かないかな」

「やめて! 死にたくない!」

「チャイムはなってるぞ! はやく席につけ!」

織斑先生の登場で事態は急速に收拾され、退屈な座学が幕をあげた。もちろん開始5分で諦めた。

「ですから、ISには——」

（へー、あつとくるーずっていう店のケーキ美味しいんだ……ここまで来たことなかったから知らなかったなあ）

「——で、そのバリアのおかげで操縦士の命は最低限守られるようになって——」

（ええ……この学園にも筆記試験あるの? 実技だけでいいじゃん……あつ体育がある。ISの実習が体育と同じだと思ってた）

「えっとここまでわからないことがある人いますか?」

「はい!」

「岡山くんどこがわからないんですか？」

「あつとくるーずっていう店の行き方がイマイチわかりません！」

「あー、あそこはまずモノレールでこの島から出てすぐの駅の南口にありますが？ 今度一緒にいきますか？」

「えー！ ずるいよ先生だけー、私も岡山くんに行きたい！」

「私は織斑くんと！」

「私は3人と行きたいな。囲まれてみたい……」

ガゴォン！

物凄い音とともにみんなの口が塞がる。
もちろん殴られたのは俺であります。

「岡山：お前開始5分で諦めただろ？ その上関係ない考え事して店の行き方を教えてもらうとは良い御身分だなあ」

「すいません……ちょっとばかりやり過ぎました」

「高橋と佐久間はいいつの面倒見役。江藤は夏樹の面倒見てくれ、そいつはとも抜けてるところがある」

「「はい」」

「納得できない！初日から目をつけられるようなことした覚えがありません！」

「脳みそクリーニングにだしてこい」

「ひどい！」

先生に口答えしていると美佳らしき人から強烈な一撃を顎にくらった。

気がついたときは最後の授業の終了10分前だった。

3 「入学式的な何か」 (後書き)

主にみどり視点ですが
これからはちよこちよこ変えていこうと思います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9262z/>

馬鹿ですが何か？

2012年1月7日15時45分発行